

漳州窯で用いられた餅花手の技法研究

－東京都有楽町一丁目遺跡出土品を中心に－

東京藝術大学大学院美術研究科

文化財保存学専攻 保存工芸領域

1321933 藤井茉弥

要旨

本論は、有楽町一丁目遺跡から出土した藍地餅花手《瑠璃釉草花文皿》を中心資料とし、餅花手の製作技法を、断面観察・類例調査・釉薬分析値に基づく再現実験および復元制作によって明らかにすることを目的とした。餅花手は呉州手の一類型として知られるが、技法的研究はきわめて少なく、特に三層施釉構造やイッチン描画の具体的工程は十分に解明されてこなかった。

本論は序章と3章で構成される。序章では、研究目的と研究方法、研究の中心資料および研究動機、論文の構成について述べた。

第I章では、漳州窯の全体像を概観し、その中でも特異な装飾技法を持つ「餅花手」作品群の特徴と位置づけを整理し、餅花手の装飾技法を中心にこれまでの先行研究を整理し、問題提起と本研究の意義を明らかにした。漳州窯製品の中でも餅花手は生産量が少なく、従来は呉州赤絵研究の補足として扱われてきた。描画道具や文様源流に関する議論はあるものの、技法的裏付けは限られている。

第II章では、日本と中国の類例品および熟観、出土品の断面観察から、餅花手の製作方法の共通点を明らかにした。藍地餅花手の製作方法は多様にあったが、製作方法は概ね共通しており、胎土に釉薬を何層も重ねた多層構造であること、イッチンは透明釉薬と藍釉に挟まれた状態で存在していることを述べた。さらに、本章の後半では、第III章で行う技法再現の根拠となる餅花手資料の化学分析の結果についても述べた。

第III章では、分析値から算出したゼーゲル式をもとに三種類の釉薬とイッチンの再現を行い、製作工程を検討した。藍地餅花手特有の発色はおおむね再現でき、イッチンも花文に関して近似した表現を得たが、筆書きによる細線表現には課題が残った。焼成条件は弱還元・ 1280°C ・30分～1時間のねらしが適していた。大皿の試作では生がけ三層施釉では剥落が生じたため、 1050°C 素焼きを挟むことで安定した結果を得たものの、湿潤状態での描画や形体の歪みの再現を考慮すると、生がけ三層施釉が原技法により近いと判断した。

結論として、藍地餅花手大皿の製作技法を、観察・分析・再現実験の三点から総合的に明らかにした。三層施釉と釉薬に挟まるイッチン構造は、湿潤状態での描画によって生じること、生釉地への多層施釉が形体の歪みを生むことを実験的に確認した。また、描画道具としては従来指摘してきた筒筆ではなく、チャンチンのような水分量の多い描画道具が用いられた可能性を新たに提示し、未解明であった餅花手の具体的製作工程を技法的根拠に基づいて示した。